

古墳について

30期生

I テーマ設定の理由

僕の家は近鉄奈良線の菖蒲池駅と西大寺駅の約中間にある。西大寺駅の東500mぐらい行った所には平城宮址があり、そのまわりには佐紀古墳群がある。古墳についてはあまりにも疑問が多いが、2、3取り上げて、その古墳群を1つの例にして自分なりに考えていきたいと思ったから、このテーマを選んでみた。

II 研究方法

(1) 研究項目

(1) 古墳の位置。 (2) 古墳と地形・環境の関係。

(2) 方法

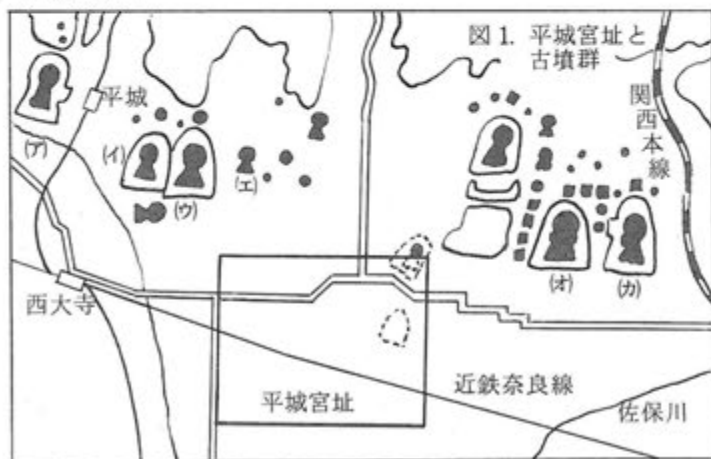
- (1) 調べる6つの古墳については正面から写真を撮る。
- (2) 研究項目を写真・地図・資料を使って調べる。
- (3) 調べたことを整理する。

(3) 参考文献

- (1) 古墳時代 上、日本の考古学4 著者 森 浩一
- (2) 古墳 ～石と土の造形～ 著者 森 浩一
- (3) 古墳と古代文化 著者 森 浩一
- (4) 奈良県地図 (12万分の1)

III 研究結果

(1) 古墳の位置



- 図1. 平城宮址と古墳群
- (ア) 神功皇后陵
 - (イ) 成務陵
 - (ロ) 日葉酸媛陵
 - (ハ) 瓢箪山古墳
 - (ニ) コナベ古墳
 - (ノ) ウワナベ古墳

古代人達が日常生活を送った平地から見上げるような山頂に古墳を築いてある場合の解釈は別とし、また群集墳—これを土地では千塚、百塚、塚原と呼ぶことが多い。群集墳の中にある個々の古墳はそこが墓地であったので、当然その内部に築いたにすぎないという解釈が生まれる。また巨大な墳丘の古墳でも自然の独立の岡を最大限に利用する場合は岡は場所によっておのずから古墳の位置が決まることもある。奈良県新庄町の屋敷山古墳やメスリ山古墳などはこの例になる。しかし、平野の中にそびえるように築かれている人工の造山としての古墳となると、なぜその場所を選んだのか確かに興味がある。もちろん高塚を築くというのは死者を仮に埋葬するのとは根本的に異なり、その土地が永久に古墳として占有されてしまうのであるから、何よりも土地関係が解決された場所だということになる。少なくとも古墳を築く側にとって、古墳の造営行為が地域の諸集団によって承認され、造営後も否定行為をされる恐れのない場所であったと思う。古墳時代よりは後の『今昔物語』に欽明陵を選定した時の様子がのっている。それによると天皇が亡くなられた時、「陵取ラムガ為」つまり「みささぎ(陵)を取らんがため」に定恵和尚という人を大和に派遣し、多武峰の辺りで土地を探したが、天皇の御墓所としては左右が下がり、前も狭かったので取らなかった。軽寺の南に広いところがあったのでそれを取ったのが欽明天皇のひのくま陵だという。陵を軽寺の南としているのは貝瀬丸山戸墳のことを考えるのに役だったが、やはり定恵和尚のように墓地を選ぶ専門の技術を持った人物がいたのだろう。

(2) 古墳と地形・環境の関係

(1) 群集墳はなぜ山腹や丘陵に多いか？

私は、佐紀古墳群の大きな古墳は省いて例えばコナベ古墳の西であるが、狭い所に多くの小規模な古墳が密集しているのに気がついた。それがみな丘陵にあることが疑問で、群集墳はなぜ丘陵に多いか、また、山腹に多いかということを探ることにした。山腹をも入れたのは他の群集墳のデータから出た結果である。この場合は、佐紀古墳群でも大きい古墳は規模的に大きくこの場合でいう群集墳とは違っているのであって、比較的小さなもので、円墳・方墳が狭い土地にお互いの墳丘の裾を接するほど密集している古墳群を指している。これは少しオーバーだけど、へだたなくても周囲を比較するとよいと思う。

山腹・丘陵がつづいているのに一定に定着しているのが群集墳である。古墳の大きさは勢力・権力を表わすという。だから権力の大きな者は、平地でも造られ、一方権力の小さいものは丘陵などに造るしかなかったということである。念のために大きいものが平地に造られたかを調べてみると、丘陵にも大きいものはあるが、群集墳はやはり、丘陵や山腹に多い。大きいものは台地に多い。群集墳は古墳群のひとつの形態にすぎず、現代人が学問を進めるうえで必要になった用語であるから典型的なものとはかく、いくらかでも中間的な実例があって、その分類に苦勞することはそれ程、意味がない。陶器千塚の例で推測できるように、群集墳が水田や畠地にもあるというのは、どうも近代から現代になってそのような土地利用がなされたようであり、古墳が次々に築かれている期間、少しむずかしく表現すると群集墳の形成期間には、農作物の生産という観点では未利用の土地、つまり、山川藪沢に群集墳を営む墓地を選定したようである。すでに開墾の終わった農耕地をこわして、古墳

にすることはまずふつうの状況ではおこななかっただろうし、仮にそれを強引に実現したとすると、死後かなりの時間がたってから、再びもとの農耕地にされてしまうおそれがある。群集墳を含め、古墳群のある土地は原則的に古墳群の形成の期間にはまだ農耕地の対象にはなっていないと推定される。だから古代の耕地の区画である条里の施行地には、前・中期の古墳や古墳群を別にして、後期の古墳や古墳群はほとんど存さない。条里の施行のころにはすでに古墳群を営む墓地はさらに比高の高い山腹や丘陵上に移行していたのであろう。以上の観点では、逆に河川沿いの荒地にも古墳のある可能性があり、実際相当例が各地で確認されつつある。

(2) 古墳の木はもともとはえていたのか？

古墳の名称が墳丘にはえていた樹木によってつけられた場合は少なくない。明日香村の高松塚古墳もその一例で、元禄ごろの『山陵図』には墳丘の頂上に松を描いている。梅山・椿山・杉山・芭蕉塚・一本杉山・二本大山などさまざまであるし、また埋まってしまった濠にはえていたのであろうか菖蒲塚というのものもある。しかし、それらの名称は比較的近い時代での古墳の履歴を物語っているだけで、築造当時の状況をうかがうことはできない。

神功皇后陵、といっても時代によって対象となる古墳が変わっているのが、現在御陵になっている五社神古墳のことかどうかは検討を要するが承和6年(839)に、この山陵の木が伐られたので天皇は勅使を派遣するほどの事件になっており、古墳の木が大きな意味を持っていた。8~10世紀には土地制度の激動につれて古墳に栽樹すること、つまり、栽樹為林、が貴族や地方豪族の重要な関心事となっていた。たとえば和氣清麻呂の伝記でも、失意の期間に父や先祖らの墳墓では栽樹が林を成していたのに伐除されたと述べている。これらの諸例は『古墳時代後期以降の埋葬地と葬地』（『論集終末期古墳』）に集めてある。8~10世紀ごろの栽樹の目的は祖先の幽魂の宿る森をつくりだすことにあるという解釈もあるが、一方では土地制度の関連で慶雲3年(706)3月の格に注目した。そこでは山川藪沢の原則を述べた後で氏々祖墓と百姓宅の辺は樹をうえて林とした場合、面積を限って私有を認めている。つまり自然の原野である山川藪沢と区別できるのはあくまで人間が手を加えて林としている場合に限っているのである。これらの事情を考えるとどうも古墳の木が築造当時から植えていた証拠にはならない。

(3) 集落と古墳群はどう関係するか？

古墳には、保存の条件が良いと、人間が骨だけではあるが残されている。そのかわり儀器や葬具など日常的でない品物が多く埋納されている。だから1つの集落と、ある古墳との間を同一人間、同一の集団という糸で結ぶのはまだ方法が見つからないというのは実状で、これからはその方法の工夫だけをライフ・ワークとする研究者が現れても不思議でない程やりがいがある。たとえば景行紀にこんな伝承がある。豊城命の孫彦狭島王が東山道十五国のかみに任ぜられ春日穴昨邑まで行ったところ、病に倒れこんだ。「是時、東国の百姓其の王の至らざることを悲しみ、ひそかに王の屍を盗みて上野国に葬りぬ」この伝承ではいよいよ無法則のように思えるが、本来上野に居を持ち、そこに定住すべく運命づけられていたのであれば、やはり定住するはずの集落の近傍に古墳を築いたのかもしれない。屍を盗むとは陰

惨なことだが、そうまでしても予定地に墓を築かねばならなかったところに単なる墓でなく、政治的な構築物としての古墳の意義がでていいる。『播磨国風土記』では、しかまのこおりあさこの里に但馬の国造あこねのみことが英保の女にあってその村で死に、墓を造って葬ったとある。英保は姫路市内と推定され、兵庫県北部の但馬とはかなり離れている。ここでは妻方の集落に古墳を築いたのだが、風土記はさらに「以後、正骨は運び持ち去りにきとしかいう」と風聞を記録している。

Ⅳ 結 論

古墳の位置が決定される場合、自然にできていた岡を最大に利用する場合は自然にその位置は定まる。しかし、人工の造山として平野の中にあるという古墳の位置決定には、はっきり言って言い切れる結論はもちろんない。けれども、『今昔物語』中の欽明陵を選定した定恵和尚の話から考えて1例にすぎないが、専門の選定をする人物がいたかもしれないという可能性は十分にある。

群集墳が山腹や丘陵に多い理由として推測できることは、まず平野や水田・畠地の中に現在あるということから考えていくとすると、これらの古墳のまわりの土地は近代になって変化して水田などになったようで、もとは山川藪沢だったということである。

また、平野などに古墳を築く場合には地域の人々の承認が必要だったであろうということの2つのことから考えると、現在、平野にある古墳というのは条里制など大規模な土地の区画が行われる以前に築かれたということになる。山腹や丘陵にあるというのは条里制(7世紀末)が施行された後のもので比高が高くなったのだろうということになる。

集落の古墳との関係は、景行紀の1例からみて、定住するはずの集落の近くに古墳を築いたのかもしれない。予定地に墓を築かねばならないところに政治的な意義がでていいる。

Ⅴ 総 括

古墳が造られるまでにはいろいろな問題を解決されてきたようだ。僕がとりあげたのは2、3の例にすぎなかったが、まだまだあると思う。古墳を調べてよくわかったが、何分にも昔のことでそれも年代があまりにもかけ離れているためにはっきりとした事実は少ない。従って、結論に近いものは出せても、はっきりとしたものは出せなかった。

古墳が築かれるには土地の問題があったが、それはやはり、天皇あるいは豪族達が勢力をふるっていたのである程度、ものを言ったと思う。勢力の大きさは古墳自体の大きさが表わしている。これら古墳はそこに葬られる人物の生前に造られたものだが、死後は実際の政治的な意味を含んでいるとはいえない。ただ何かを示そうとするものあらわれだけに思う。最後に感想を述べるとすれば、実にこのテーマはばく然としてむずかしかったということと、自分として考える上では困難が多かったことなどがあげられる。